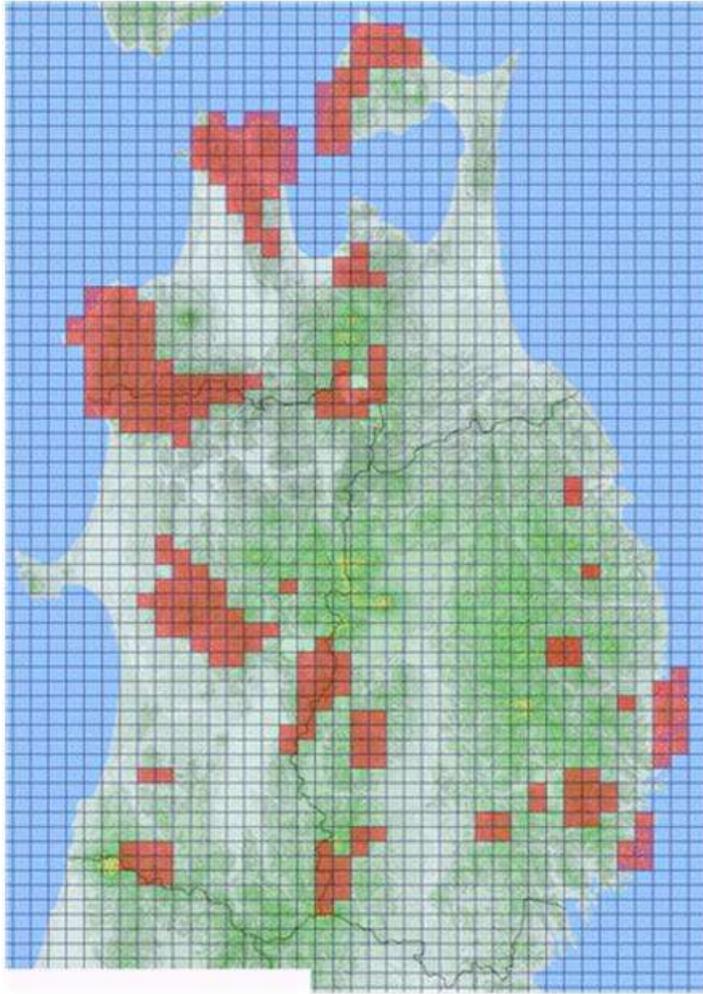
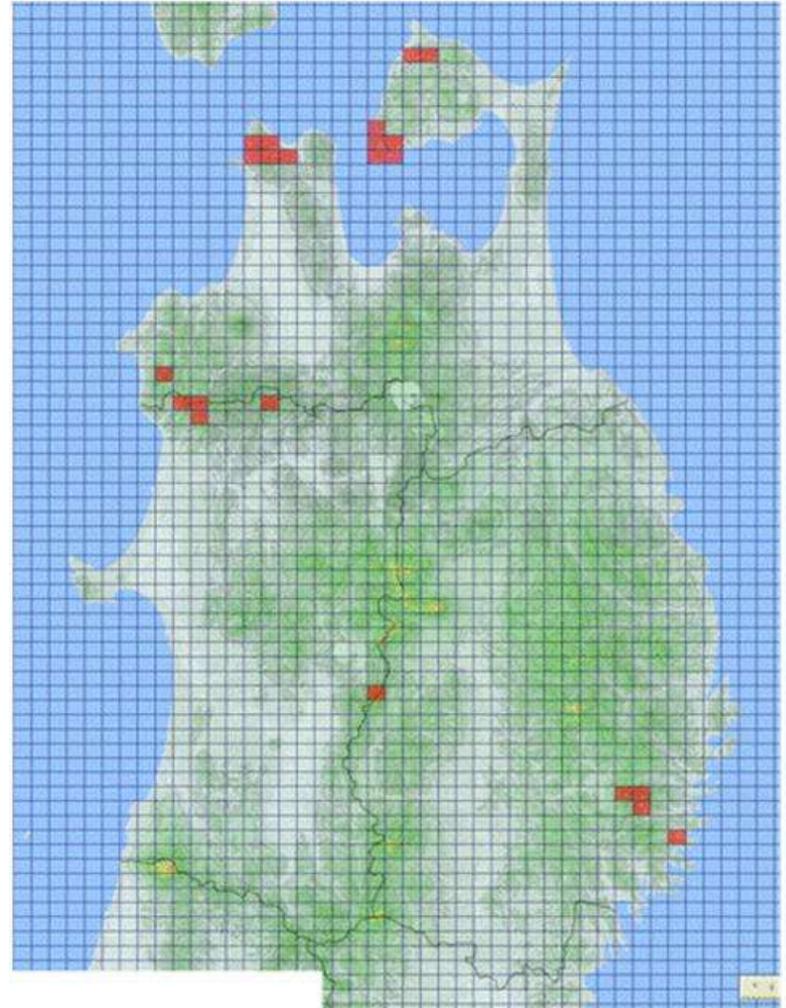


ことの発端

ニホンザル分布の縮小



1890年(明治23年)



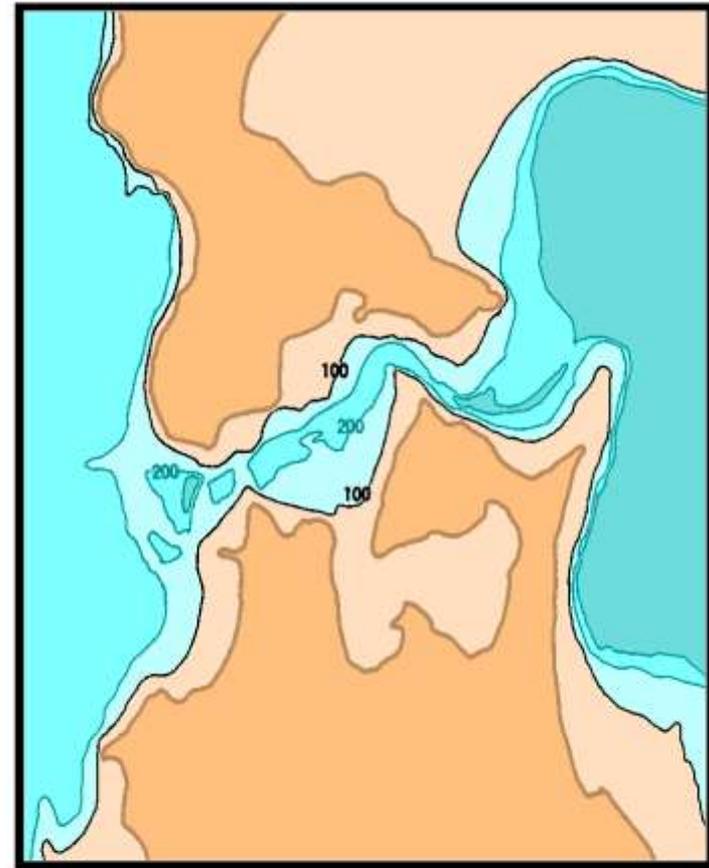
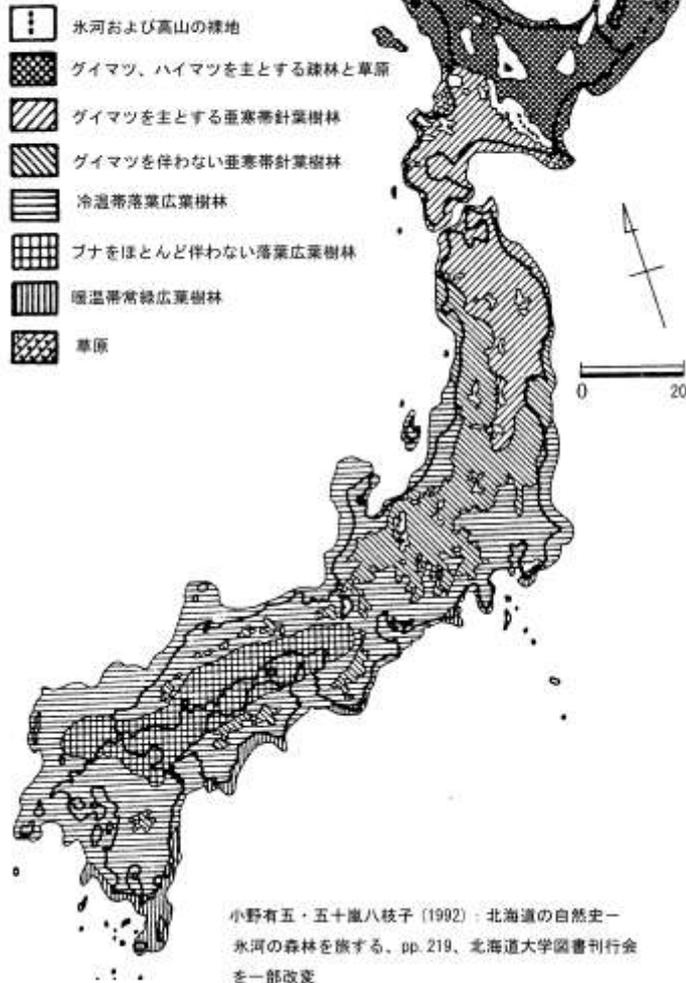
1960年(昭和35年)

# 東北地方・自然と人の歴史的特徴(通史として)

- 最終氷期、東北部は一部亜寒帯針葉樹林帯
- 後氷期、冷温帯地方 ヒノキ、ヒバ、スギが混じる落葉広葉樹林帯 年平均気温3~14℃, 降水量500~2800mm
- 西南日本が弥生時代に入っても狩猟採集文化(縄文時代的  
文化)が続いた地域
- 古代、大和朝廷から見て異民族「蝦夷」抵抗の地
- 馬飼の地、官牧・貢馬の地(軍馬養成の地)
- 中世、奥州・藤原平泉文化の盛衰
- 特徴ある狩猟採集民俗の発達(例:秋田のマタギ集団)
- 近世、冷害多発地域(米穀本位制となった近世は寒冷気候  
による米の不作で飢饉が頻発し、多くの餓死者が出た。)
- 日本海側多積雪地帯、太平洋側ヤマセ地帯

# 最終氷期の植生と津軽海峡

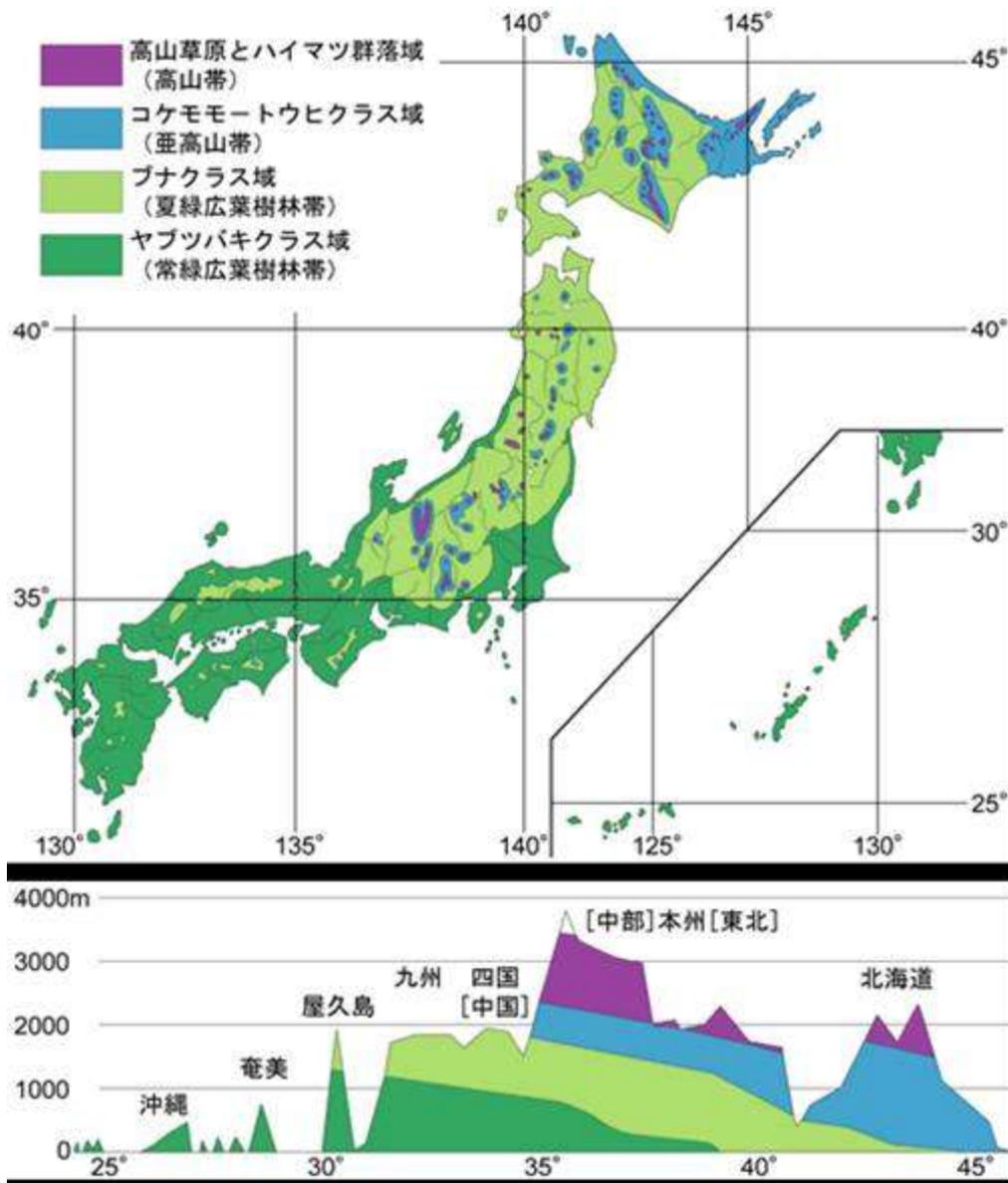
最終氷期、最寒冷期の日本  
列島の植生図



最終氷期時の津軽海峡

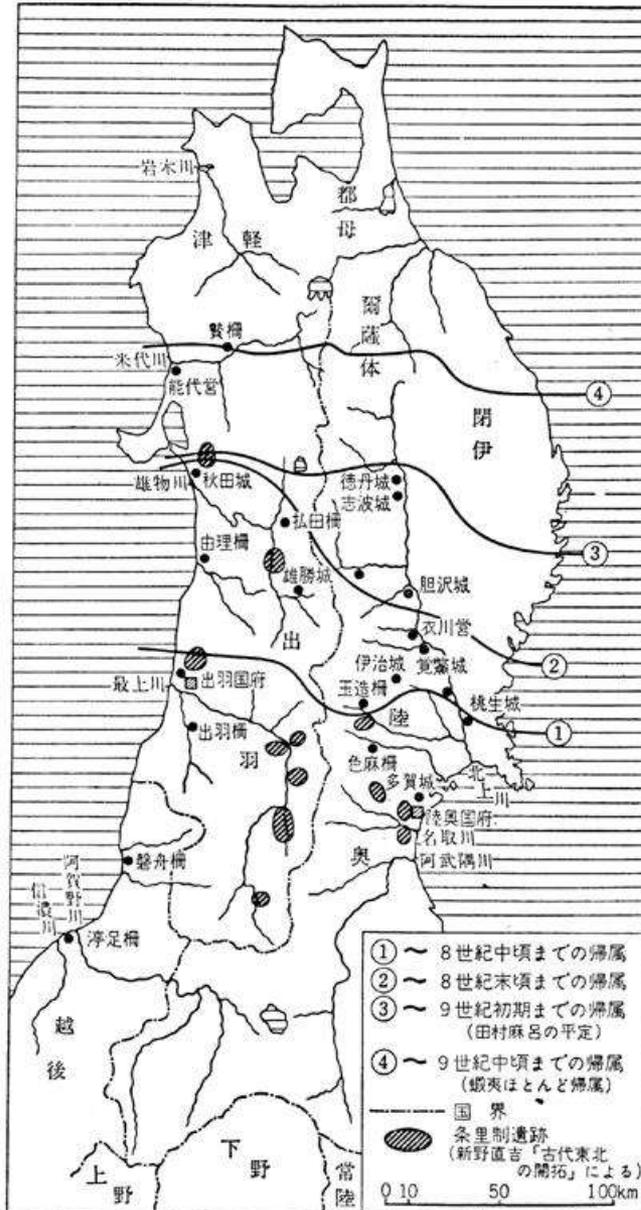
- 現在の陸地
- 最終氷期時の陸地(推定)
- 最終氷期時の水深0-100 m
- 水深100-200 m
- 水深200-300 m





夏緑広葉樹林帯では、獣の多くは冬先に肥える。

かつ冬期の落葉は狩猟を容易にするため、農閑期にはいる冬先は絶好の狩猟期となる。



東北地方開拓の進展

まつろわぬ蝦夷

789年(延暦8年)

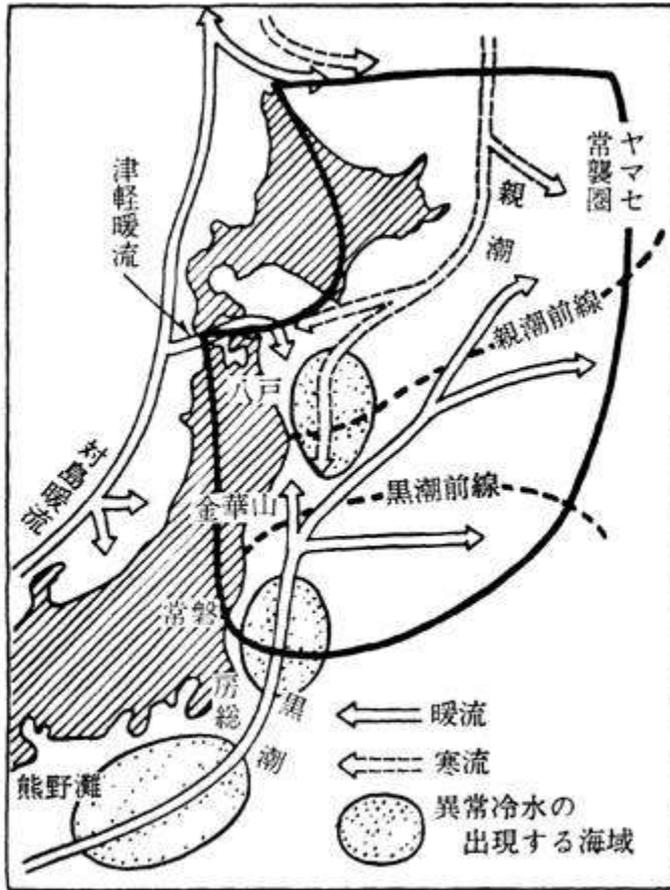
衣川の闘い

蝦夷統領 アテルイの抵抗戦

太平洋側は日本海側より、大和朝廷による平定が遅れる。

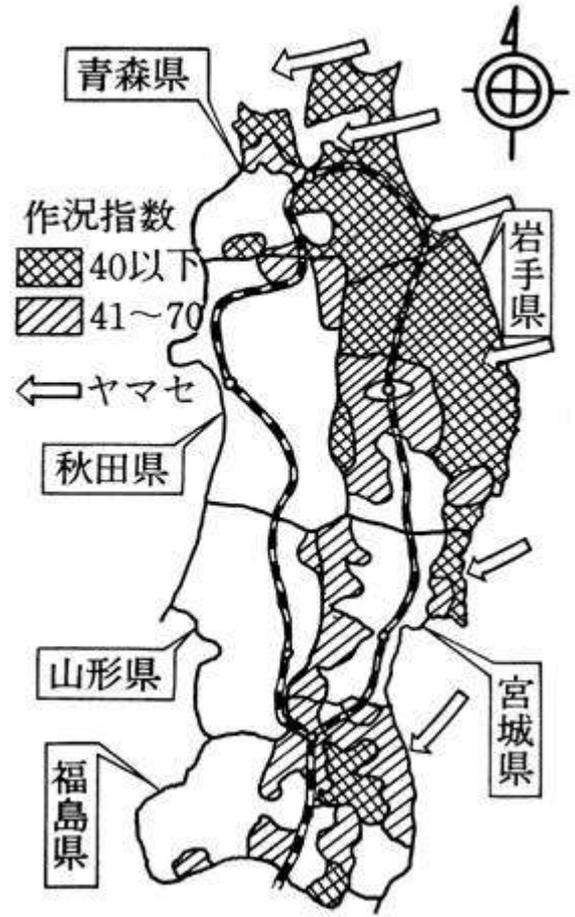
# やませ常襲地域は太平洋側にかたよる

4.12図 ヤマセ圏と海流



＜福島信一氏の資料から作図＞

1.1図 昭和55年の凶作地帯



「風土の刻印 ヤマセ社会」東奥日報社 から引用

江戸時代 東北地方北部は、稲作農業を営むには、気候的にも、藩行政をみても、たいへん厳しい状況下にあった。

南部・津軽両藩凶作など災害年表

西暦	年号	津軽藩	南部藩	全国
1615	元和1	大凶作皆無作	不熟 凶作	
1616	2	不作不仕付		
1617	3	大凶作皆無作	凶作	
1619	5		凶作	大飢饉
1640	寛永17	大凶作皆無作		
1641	18		大凶作皆無作 霖雨 低温	
1642	19		不作 水害	
1646	正保3		凶作 高物凶作	
1647	4		水害 盛岡洪水	
1648	慶安1		水害	
1658	万治1		不作	
1659	2		不作	上方飢饉
1661	寛文1		凶作 6分作霖雨 大風 水害	
1669	9		凶作 奥羽飢饉	
1670	10		不作 (凶作) 盛岡大洪水	
1674	延宝2		凶作	
1675	3		沢内大凶作	
1677	5		水害 盛岡洪水	
1680	8	不作 大洪水	不作、丹藤川洪水	
1682	天和2		熱病流行	
1686	貞享3		盛岡・八戸領凶作	
1687	4	藩南部藩へ廻米	不作 飢饉	
1688	元禄1		不作 2~3万石減収	
1689	2		不作 盛岡洪水 沢内大飢饉	
1690	3		沢内大飢饉 八戸領不作	
1692	5	凶作	凶作	
1694	7	大凶作皆無作	大凶作皆無作 冷害 飢饉	
1695	8	弘前藩餓死3万	盛岡藩餓死5万	
1696	9		不作	
1699	12	凶作	大凶作2分作 霖雨 早冷	
1700	13		不作 (前年影響)	
1701	14	大凶作	大凶作皆無作 冷害	
1702	15	大凶作	大凶作皆無作 霖雨 飢饉	
1703	16	平年作	凶作	
1705	宝永2	凶作	凶作5分作夏霖雨 春早魃	
1707	4		不作5分作霖雨 霜 低温	
1718	享保3	疫病流行	疫病流行	
1720	5	凶作	凶作 沢内飢饉	
1724	9	豊作	不作 霖雨 大洪水	
1725	10	ひでり豊作	ひでり凶作	
1728	13	八戸大洪水不作	不作 霖雨 大洪水	
1729	14		不作 大風雨	
1731	16		不作 大風雨	
1732	17		不作 田畑虫害	
1733	18	豊作	不作 田畑虫害 大早魃	
1736	元文1	豊作	凶作 飢饉	
1741	寛保1	豊作	不作	
1744	延享1		不作 虫害	
1745	2	不作	不作	
1748	寛延1		凶作 虫害 早魃	
1749	2	大凶作皆無作	凶作2分作 霖雨 風雨	
1753	宝暦3		凶作	
1755	5	大凶作皆無作	大凶作皆無作 霖雨大飢饉	

1756	6		凶作5分作 前年影響
1757	7		不作6分作 霖雨 洪水
1762	12	凶作5分作	
1763	13	凶作4分作	
1764	明和1	大豊作 八戸領凶作	
1765	2		不作 早魃 大雨
1766	3	大地震 八戸半作	
1767	4		凶作 早魃 霖雨 虫害
1772	安永1		凶作 霖雨 洪水
1773	2		凶作 大雨 虫害
1774	3	疫病流行	疫病流行
1775	4	不作 疫病数万死亡	
1776	5	不作 疫病 はしか	霖雨 洪水 山崩れ
1777	6		凶作 霖雨 洪水
1778	7		不作5分作 霖雨 洪水
1779	8		不作7分作 霖雨 洪水
1781	天明1	岩木川大洪水	不作
1782	2		不作5分作 冷害
1783	3	大凶作皆無作	大凶作皆無作 霖雨 早冷
1784	4		大霜害 大飢饉
1785	5		不作7分作 飢饉
1786	6		凶作3分作 霖雨 風雨
1787	7		山崩れ 飢饉
1788	8		凶作3分作 霖雨 大飢饉
1789	寛政1		凶作5分作 霖雨 飢饉
1791	3		凶作 風雨 大洪水
1793	5		凶作5分作 大雨洪水早冷
1795	7		凶作6分作 大風雨
1798	10		凶作 植付期霖雨
1799	11	凶作6分作	凶作 低温、早魃 洪水
1801	享和1		凶作 洪水
1813	文化10	凶作	大凶作2分作 霖雨早冷
1814	11		凶作 霖雨 洪水
1815	12		凶作 霖雨 早冷
1825	文政8		大凶作4分作 霖雨 早冷
1832	天保3	凶作5分作	凶作4分作 早冷
1833	4	大凶作皆無作	大凶作皆無作 霖雨大飢饉
1835	6		大凶作4分作 霖雨大飢饉
1836	7	大凶作	大凶作皆無作 霖雨大飢饉
1837	8	凶作5分作	大凶作4分作 大飢饉
1838	9		大凶作皆無作 大飢饉
1839	10		凶作4分作
1849	嘉永2		不作
1850	3		不作
1853	6		不作 早魃
1856	安政3	八戸、地震 津波	
1866	慶応2		凶作
1869	明治2	大凶作	大凶作
1870	3		凶作 霖雨 霜害
1886	19	コレラ流行 3774人死亡	
1887	20	天然痘 1015人死亡	
1894	27		
1896	29		大津波
1902	35	凶作	
1904	37		
1912	大正1		
1913	2	大凶作	
1919	8		
1923	12		
1927	昭和2		
1931	6	冷害凶作	
1933	8		三陸地震 大津波

(森嘉兵衛「岩手県の歴史」山川出版、S47)  
 (宮崎道生「青森県の歴史」山川出版、S52)  
 (日本地誌研究所「日本地誌3」二宮書店 1975) など参照

日清戦争  
 日露戦争  
 スペイン風邪  
 関東大震災

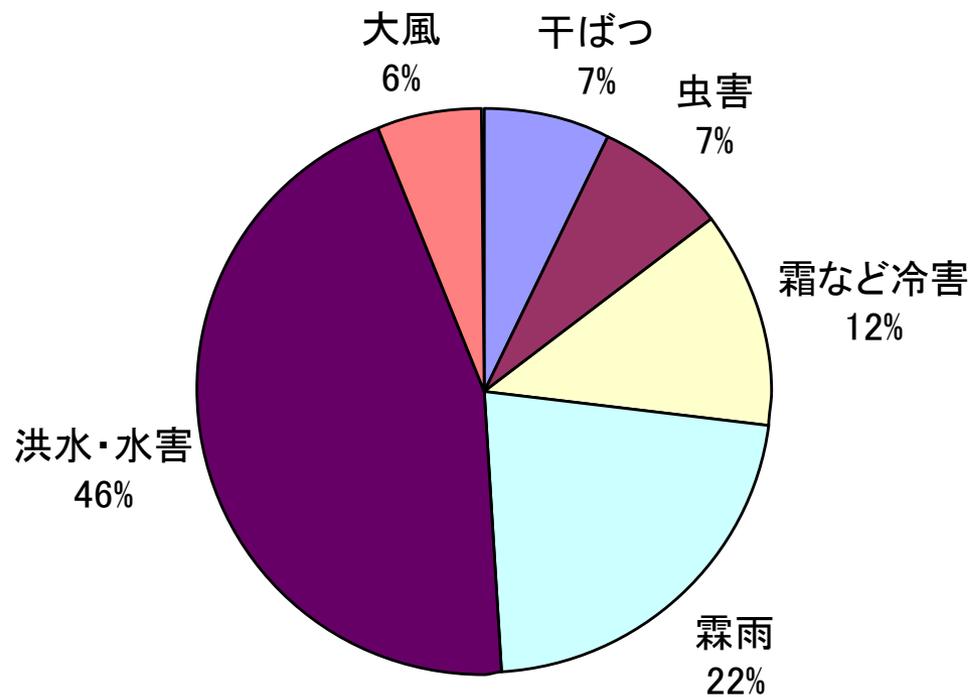
太平洋戦争



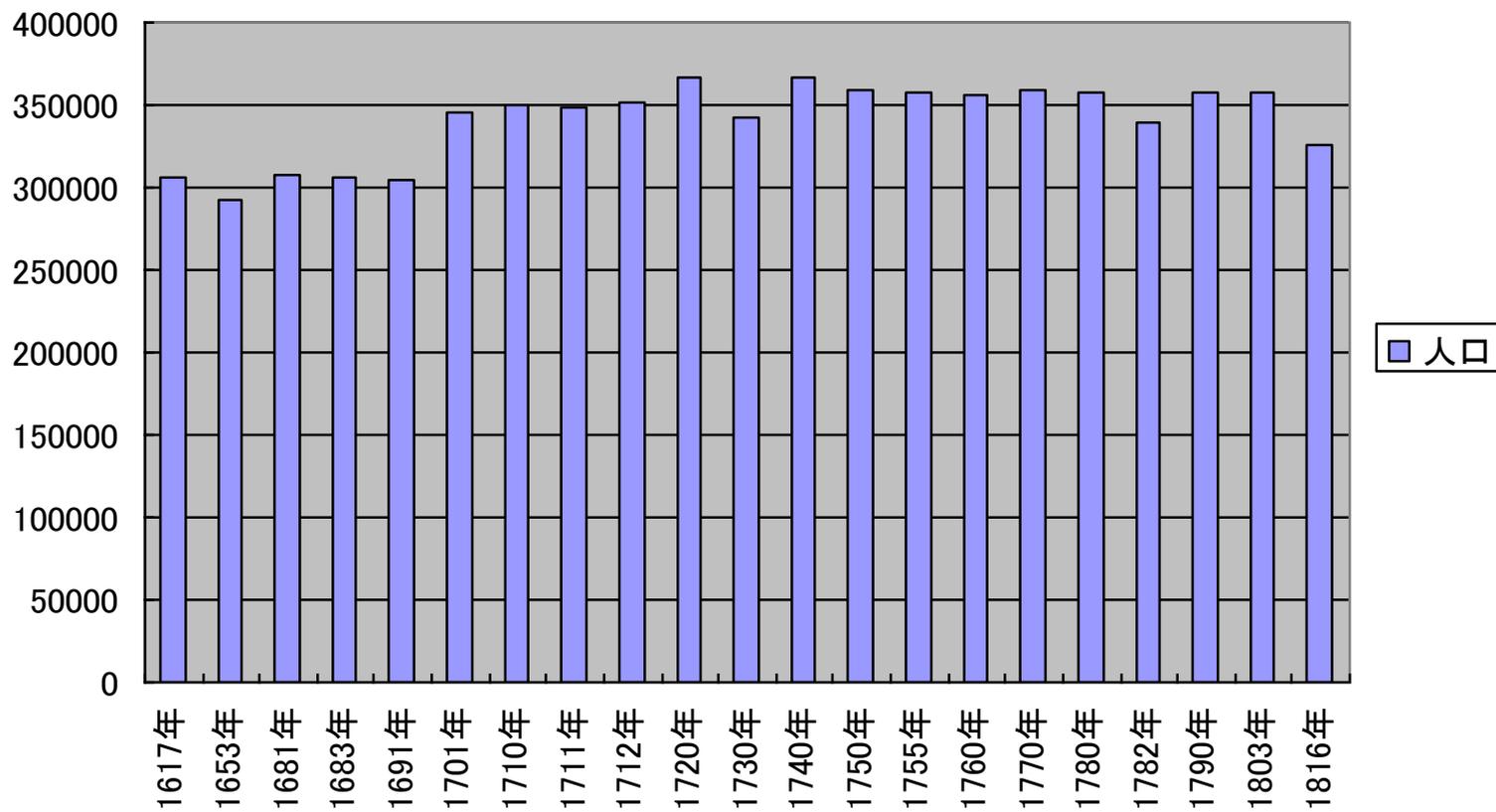
建 立	天保3年(1832) 4月28日
記 念	天明3年(1783)の五十回忌
旧位置	鶴飼字笹森
指 定	昭和42年3月1日 村指定
高 さ	120cm
幅	110cm

作柄に与えた自然災害例（盛岡藩1615年～1869年）

回数で表示

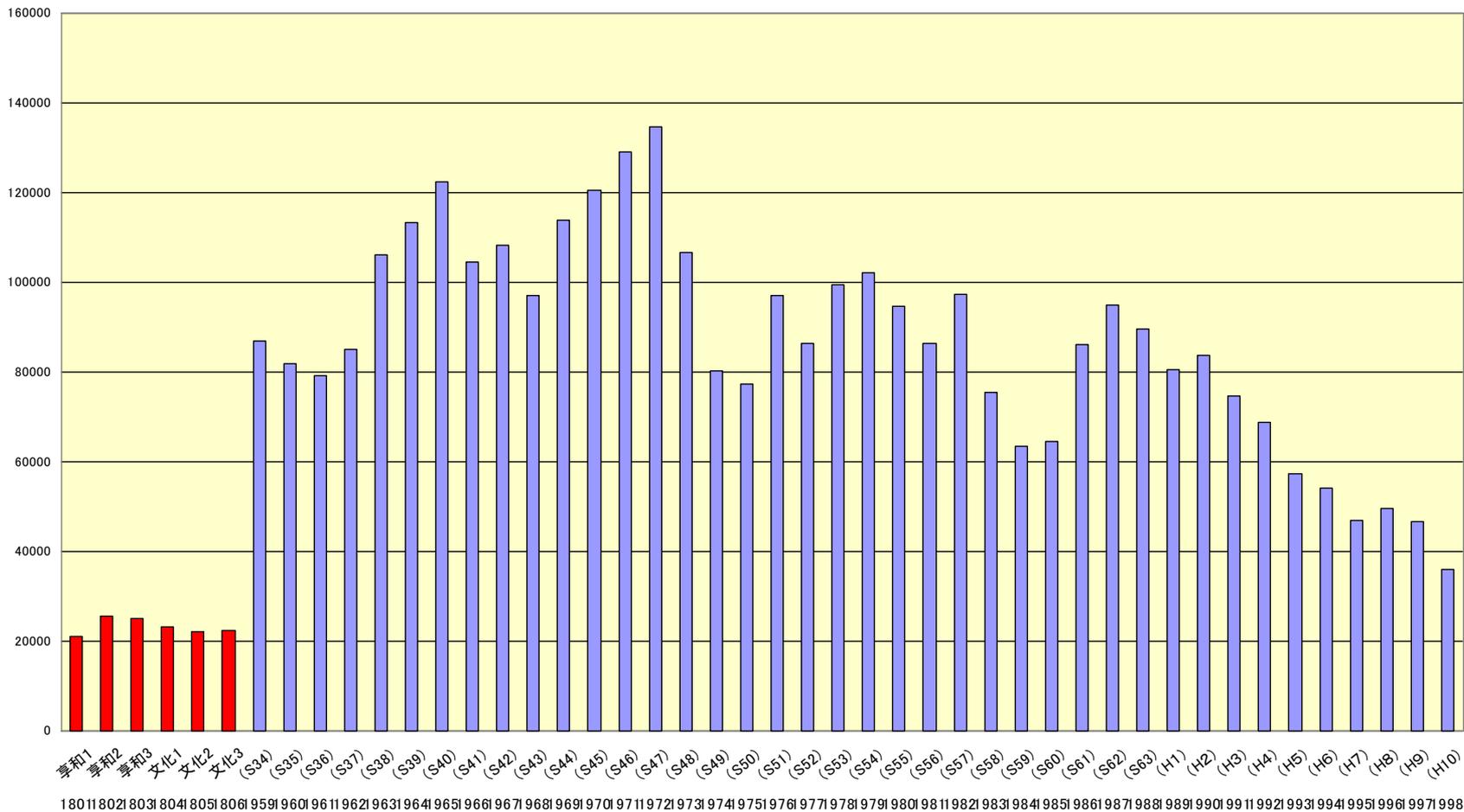


盛岡藩人口推移





# 下北半島ヒバ年間伐採量推移(立方メートル)



# 青森ヒバ

(ヒノキ科  
別名ヒノキアサギ)

国宝金色堂の建築材料は多湿の風土腐朽菌に強いヒバ材で、今次の金色堂解体修理でもその殆んどが再使用に耐えられた。中尊寺の堂塔造営に要したヒバ材は青森県下北地方から筏に組んで海路をとり北上川を上って搬入したか或いは早池峰山から北上川を下ったか、二説あるがいずれ平泉文化を今に伝えた主要役はヒバ材であったと云える。ここに植栽された青森ヒバは下北地方の産で樹齢約三十年。関宮林署が植栽したものである。

昭和五十六年夏 中尊寺

# 川井村郷土館(北上山地内)





## 800Kgの 材木を担ぐ ウシ

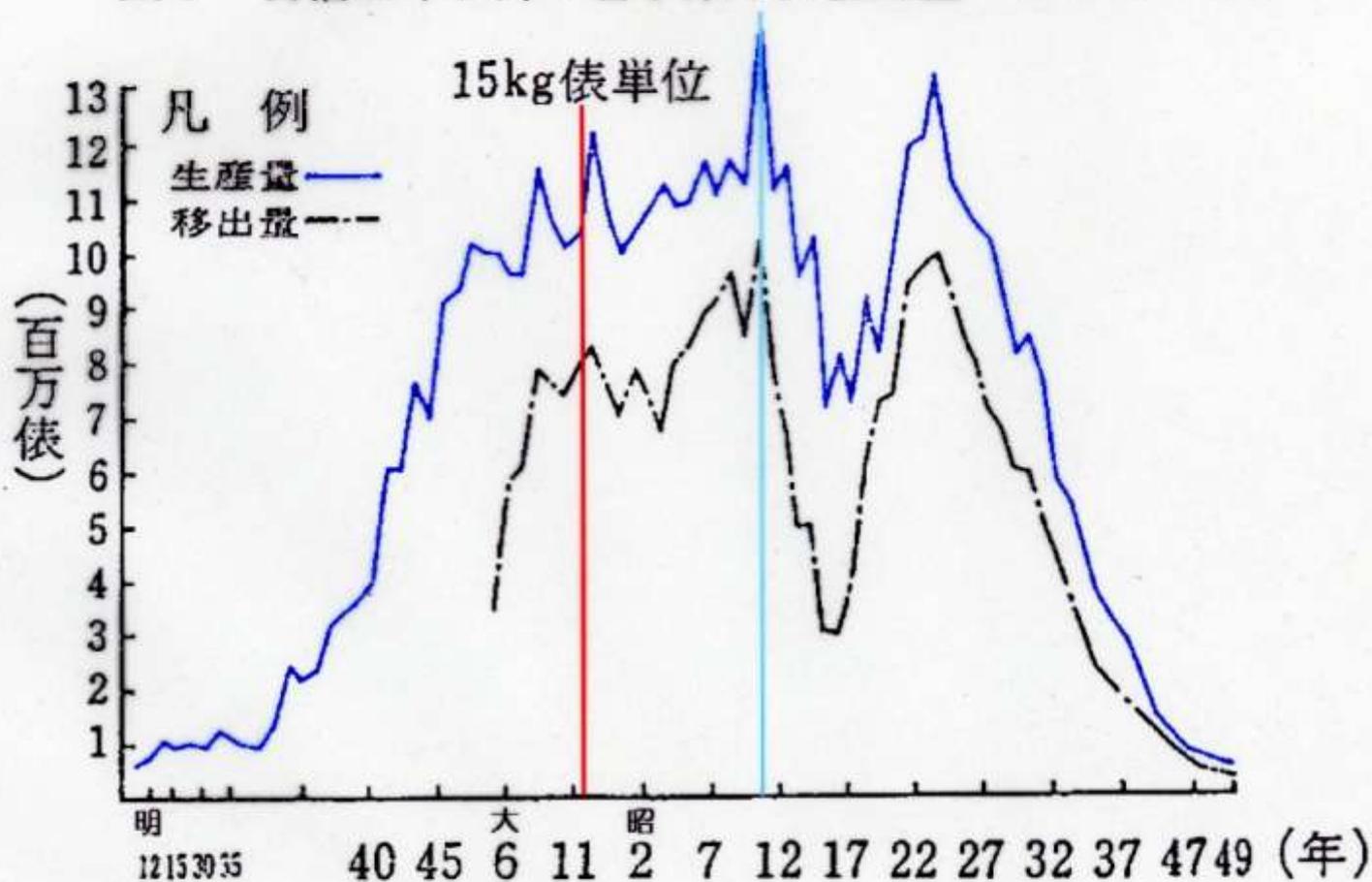
### 木材を運ぶ「鮮短」と牛方

昭和30年初期 岩手県一ノ関市室根町

佐藤徳治 氏 提供

「鮮短」とは朝鮮牛と短角を交配した牛のことで、もともと役用牛として南部牛の優れた能力を受け継いでいる日本短角種に、同様にその能力が優れている朝鮮牛を交配した。鮮短は奥山から木材を切り出す上で、馬よりは高い威力を発揮した。馬は木材を引いて運び出すため、小石が木材に食い込み製材所からは敬遠された。その点、牛は背で運ぶため、そのようなことはなかったという。写真はおよそ800kgの木材を運んでいるところである。戦後の経済成長期に木材の需要が高まり、各地の木材の切り出しに、このような牛が求められていた。牛の背丈は5尺程（約151.5cm）あったという。

図6 明治12年以降の岩手県木炭生産量・移出量の変遷



「県統計書」「木炭県営検査50年の歩み」

「県木炭協会」資料より



(五)  
第三日に射られた  
猿(六頭)。  
右の猿は山下の  
「神宮の岩窟」の  
前にて。  
大滝谷に夕暗迫り  
んとする頃。  
向て右 宮本繁夢  
庵氏 左 櫻子岡。

# 奥羽銀嶺猿群獵記

川 端 理 事

薬 師 越 え

二月二十八日一行六人、積雪八尺餘の深山の中をイリスミの澤に入つた頃雪上に雨来る。暗玉俱く飛来り、飛去り、  
私共の越えやうとする薬師ヶ嶺は去の中に妻を隠してしまひ、遂に私共の行子さへ見えないう有様となる。  
雪中の雨に全身の濡れる幸さは體験した人のみの知るだ。  
一行は澤の途中の橋の下に雨を除けて行かうか、歸らうかの相談をしたが、兎にも角にも申邊まで登つてみやうと云ふ  
ことになる。

申邊の原始林に二つの小さな小屋があり、吾等の親爺中名獵人其六爺が鎌の藁木を削りに来て泊つてゐる。

私共の聲で親爺は小屋の藁の垂れを掲げて出て来た「早くこの荒天に來たノウ」

親爺は老の眼をしばたいて云ふ。

「どうだ親爺この天候は」

宮本氏は第一番に聲をかける。

「この空では薬師ヶ嶺は越しましめエ」十間先も見えない雨霧の中であるが、親爺は嶺の頂邊の方を眺めて云ふ。  
遙かの薬師ヶ嶺の嶺は轟々と山鳴りがしてゐる。

# 有名な八戸藩イノシシ荒れについて

1745年～1754年 イノシシによる作物被害で困窮  
特に1749年イノシシ飢渴により3000人死亡

- 大豆生産拡大と連作厭地障害の休耕地の拡大、その結果休耕地葛根などの繁茂がイノシシの増加を招いた。
- オオカミ駆除(1670年～1730年)によるイノシシの増加
- 八戸藩の藩主による狩猟行事のなさと肉食禁忌の強化
- 生類憐れみの令(1689年～1709年)の影響

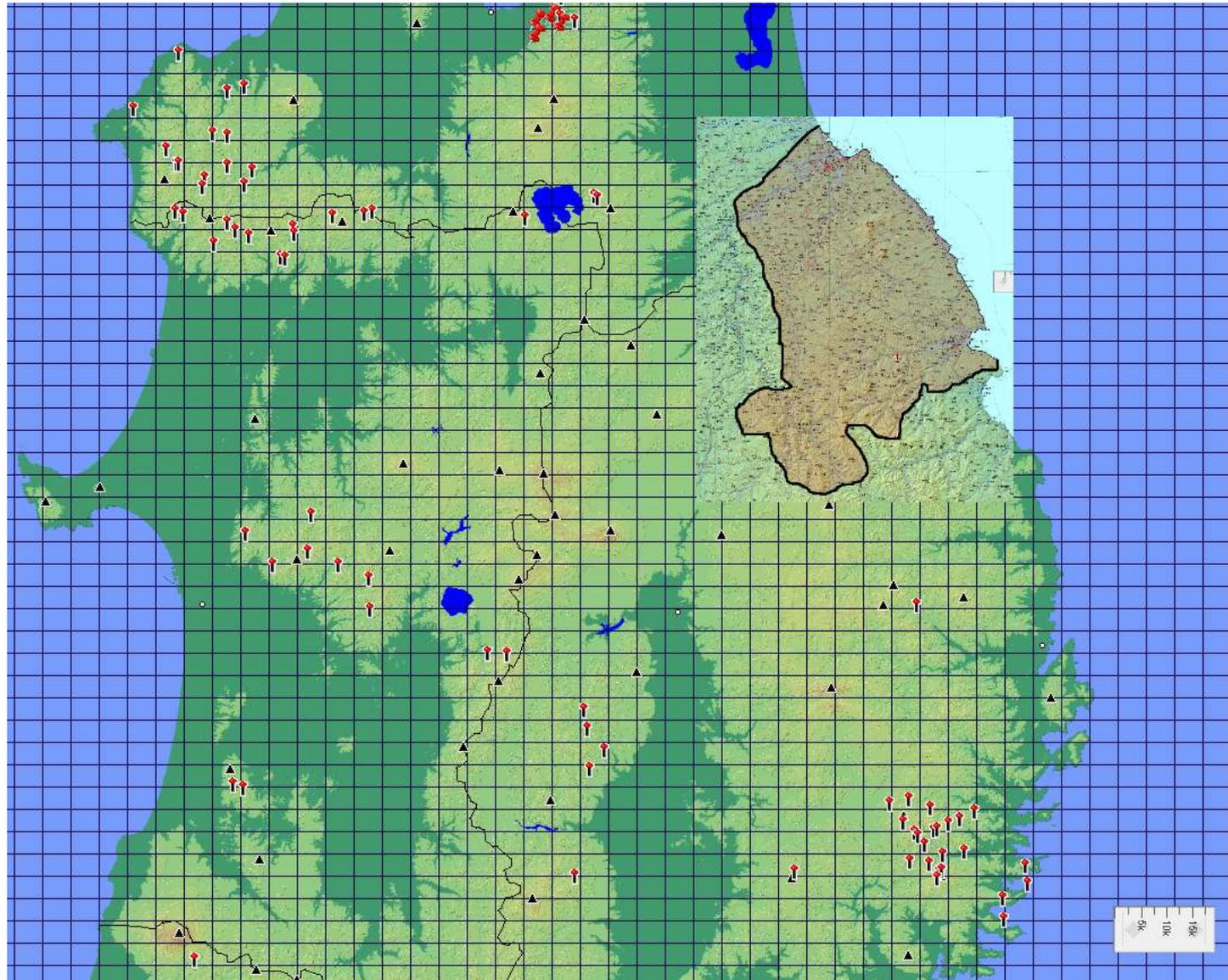
## 犬に関する記述

1746年	猪荒れのため犬を飼い置くよう達し
1749年	猪取りのため久慈の狩り巧者7人+犬5匹派遣
1751年	家中町内では、犬による怪我人多く犬抱えを停止
1808年	「病犬」多く、犬狩り命令
1808年	犬狩り、総数444頭(♂264頭、♀180頭)
1813年	犬狩り命令

# 盛岡藩全図



# 八戸藩は1664年(寛文4年)盛岡藩から独立



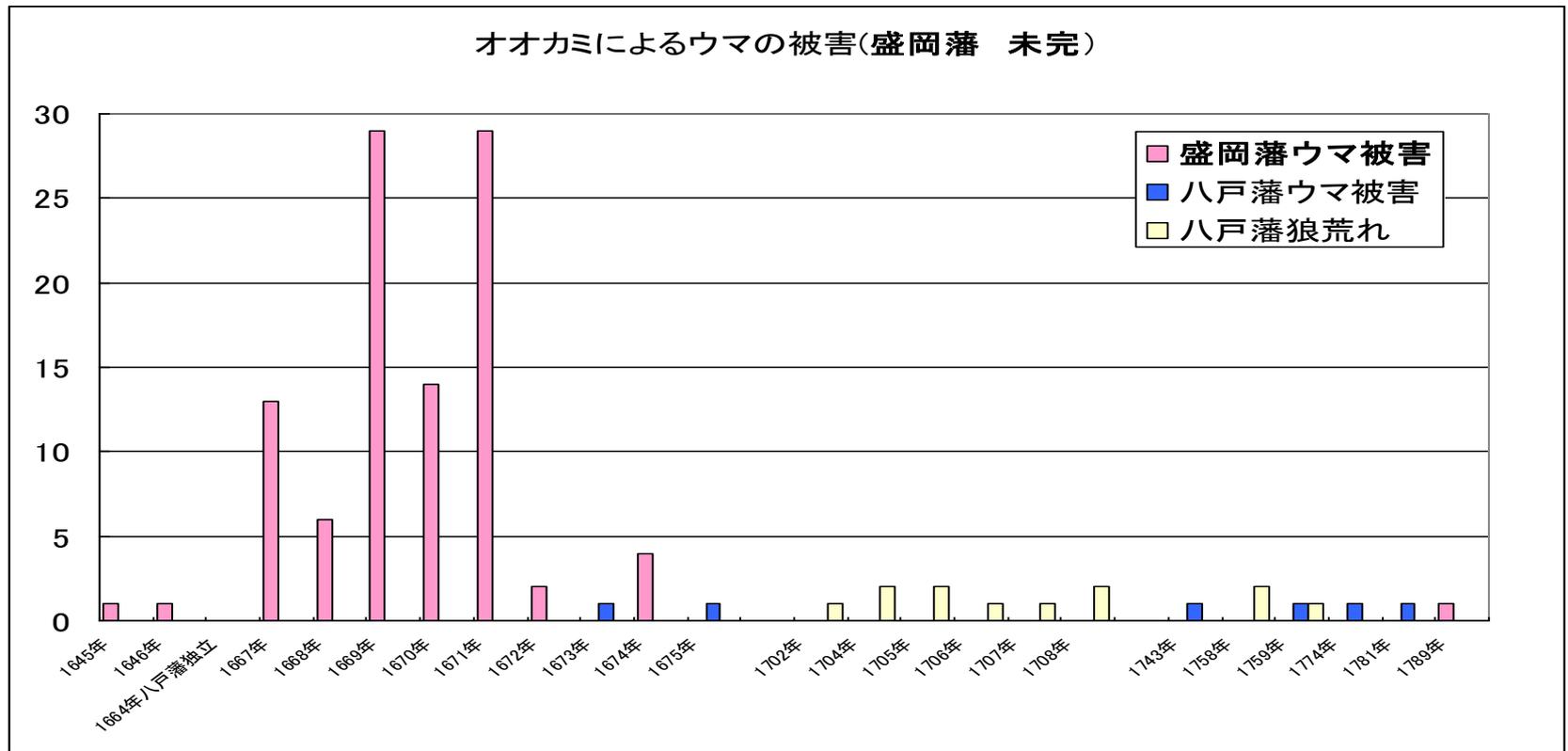
# オオカミによる人馬への被害

東北班:菊池勇夫氏による文書抜き書き、発表された情報を時系列でグラフ化してみたもの(以下 同)

## 人への危害

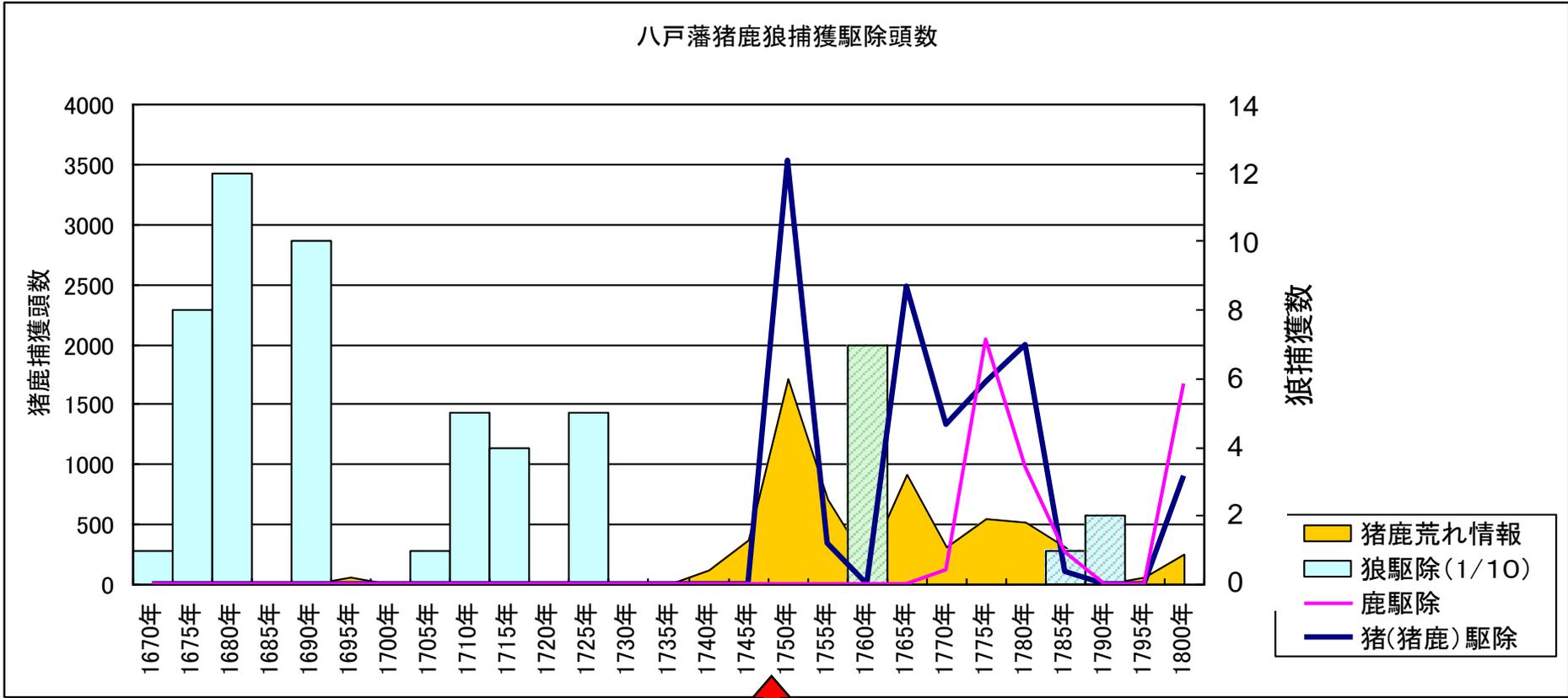
- 1674年(盛岡藩山根通) 人家へ入る
- 1704年(八戸藩山根通) 人馬へ危害
- 1704年(八戸藩軽米通) 人を殺害

## 馬への危害



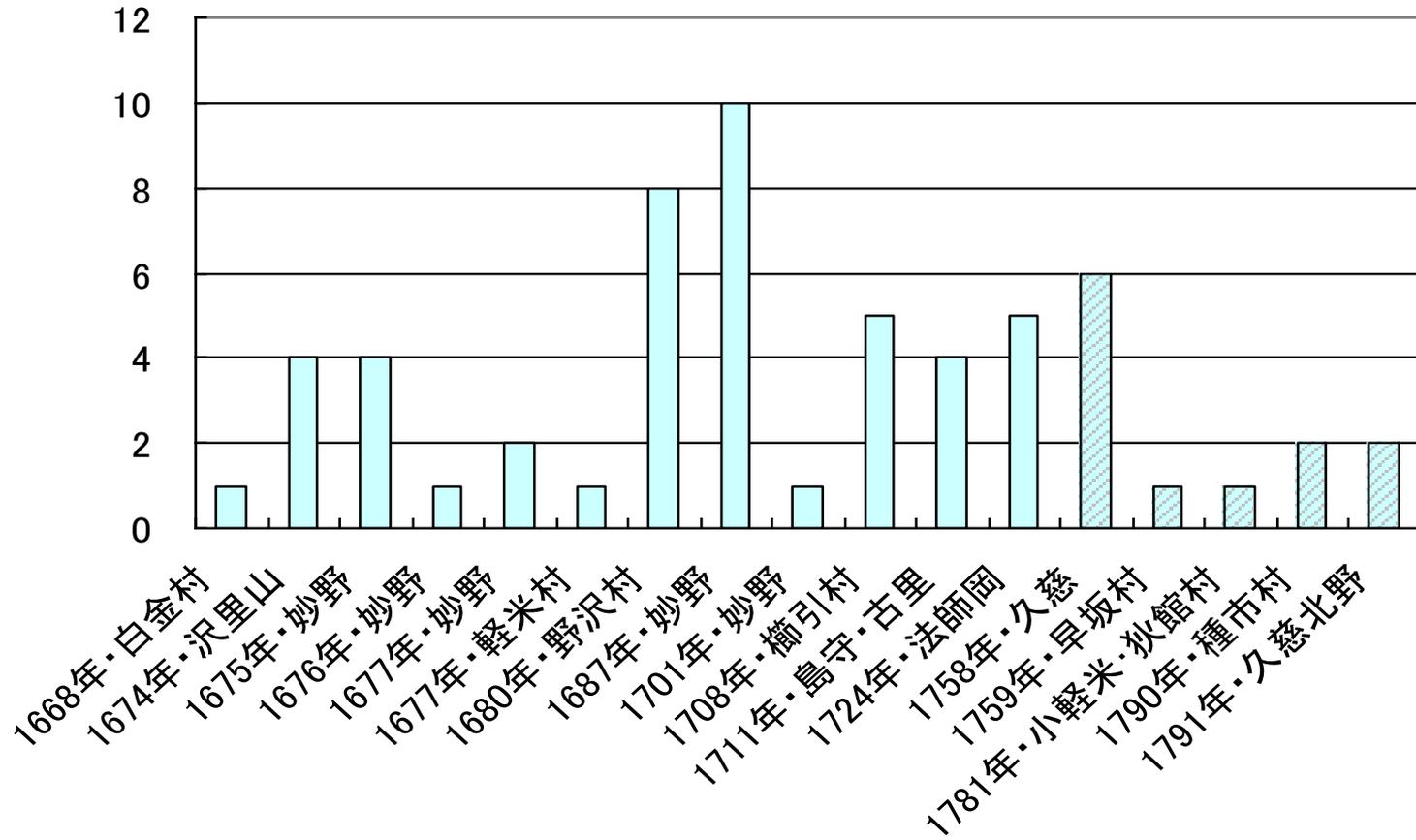
※ 5年ごとにまとめたもの

### 八戸藩猪鹿狼捕獲駆除頭数

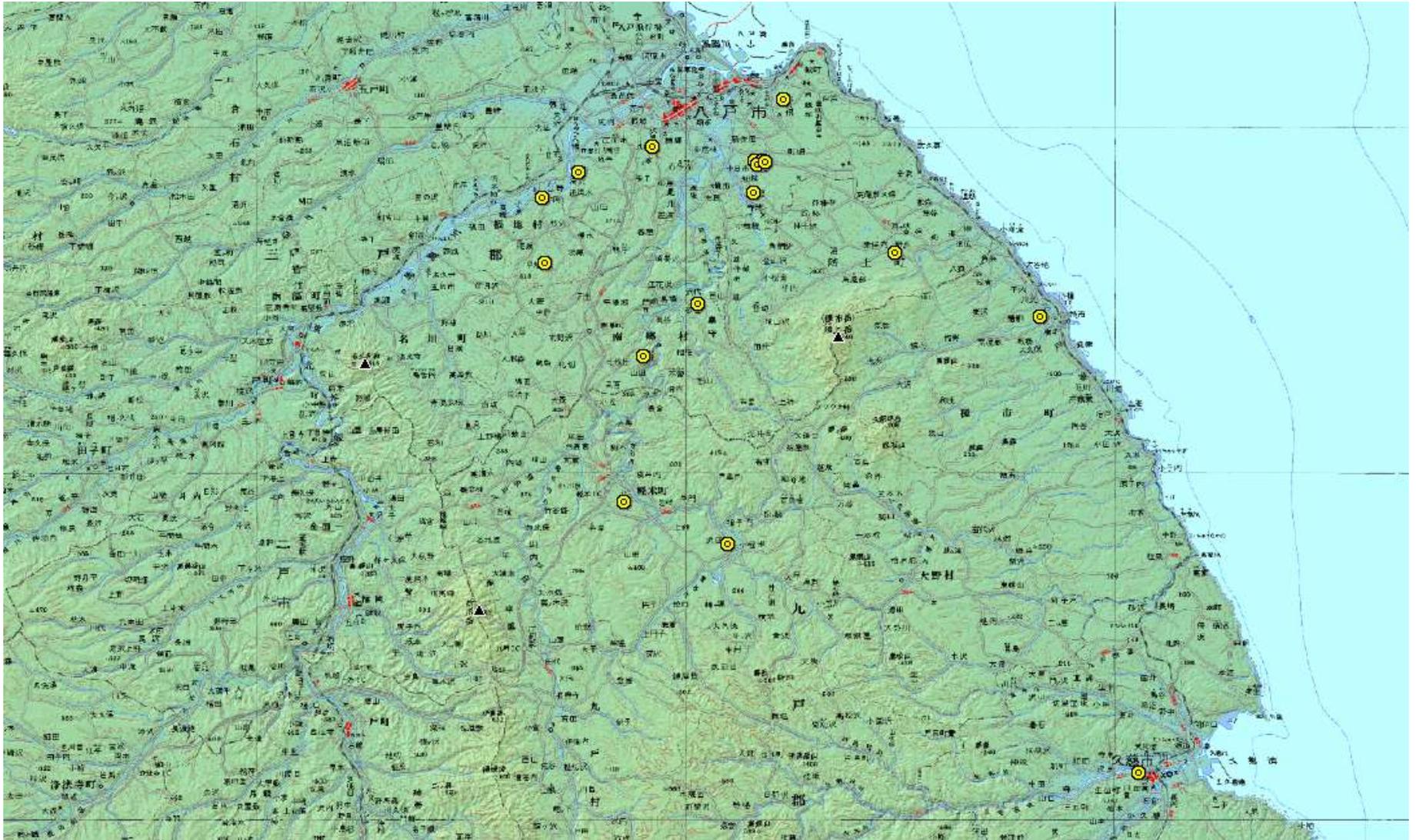


1749年猪飢渴3000人飢え死

1668年～1790年八戸藩内狼駆除頭数



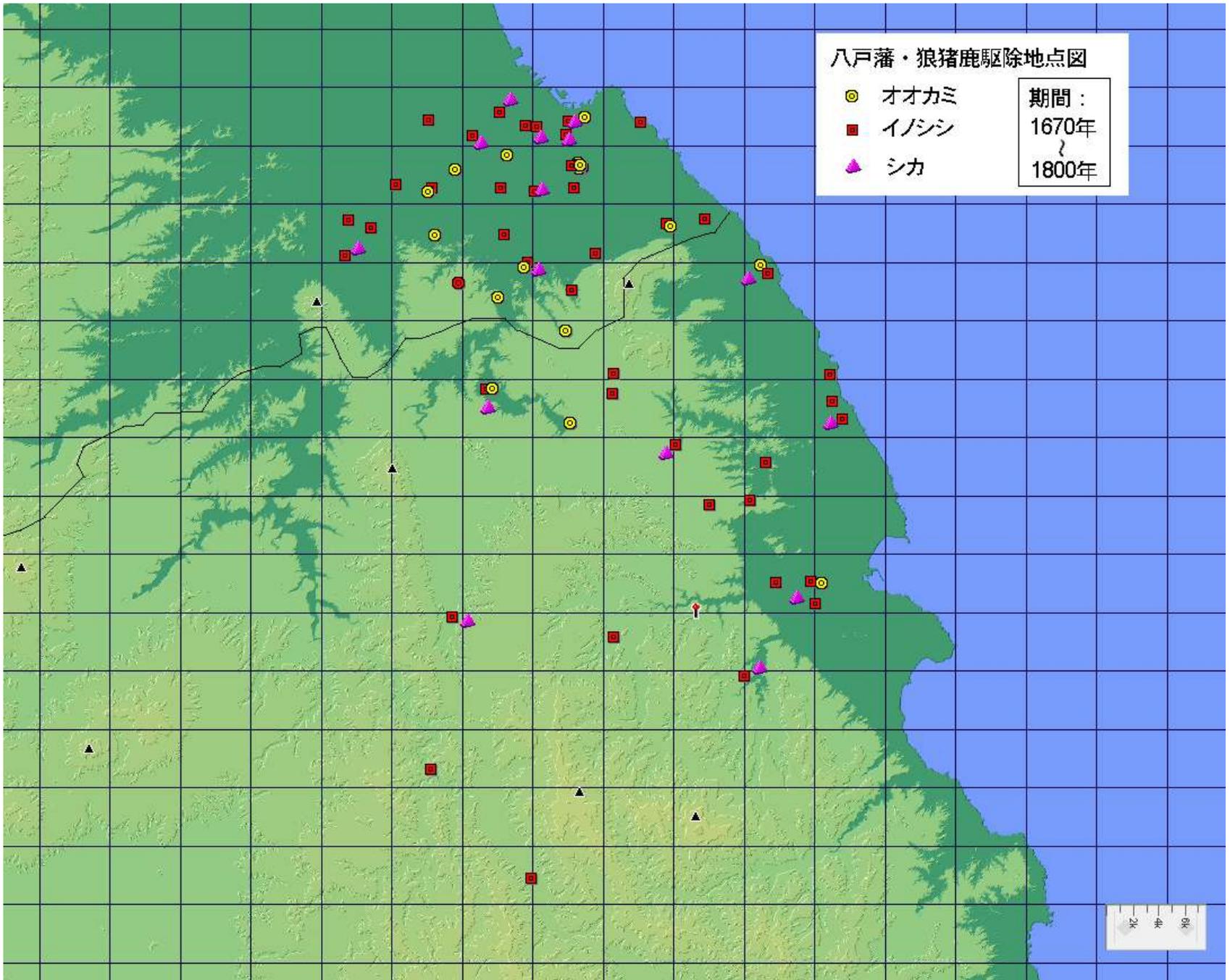
# 八戸藩でオオカミが駆除された場所(期間:1670年~1800年)



八戸藩・狼猪鹿駆除地点図

- ◎ オオカミ
- イノシシ
- ▲ シカ

期間：  
1670年  
～  
1800年

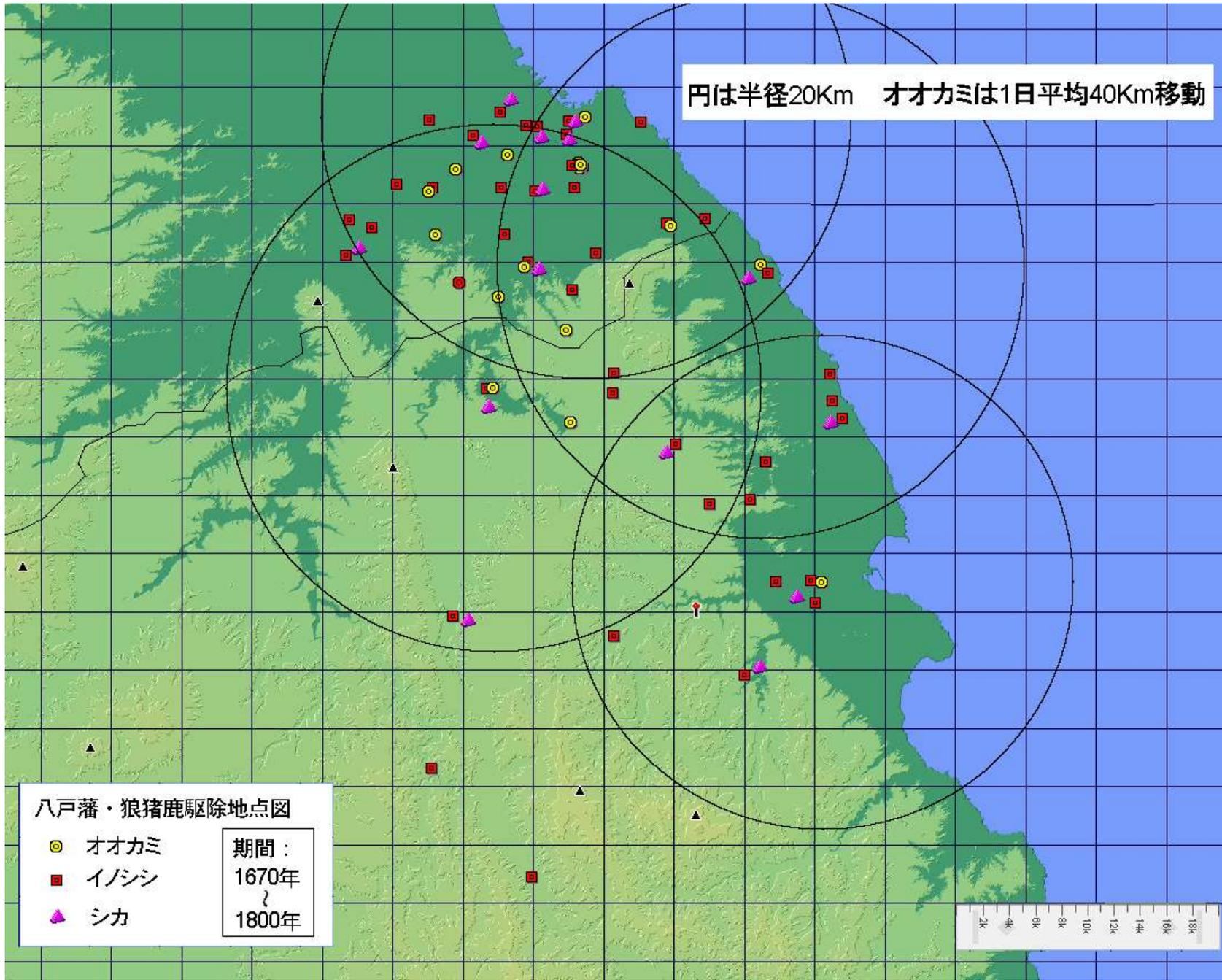
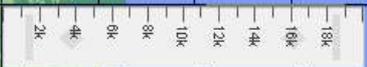


円は半径20Km オオカミは1日平均40Km移動

八戸藩・狼猪鹿駆除地点図

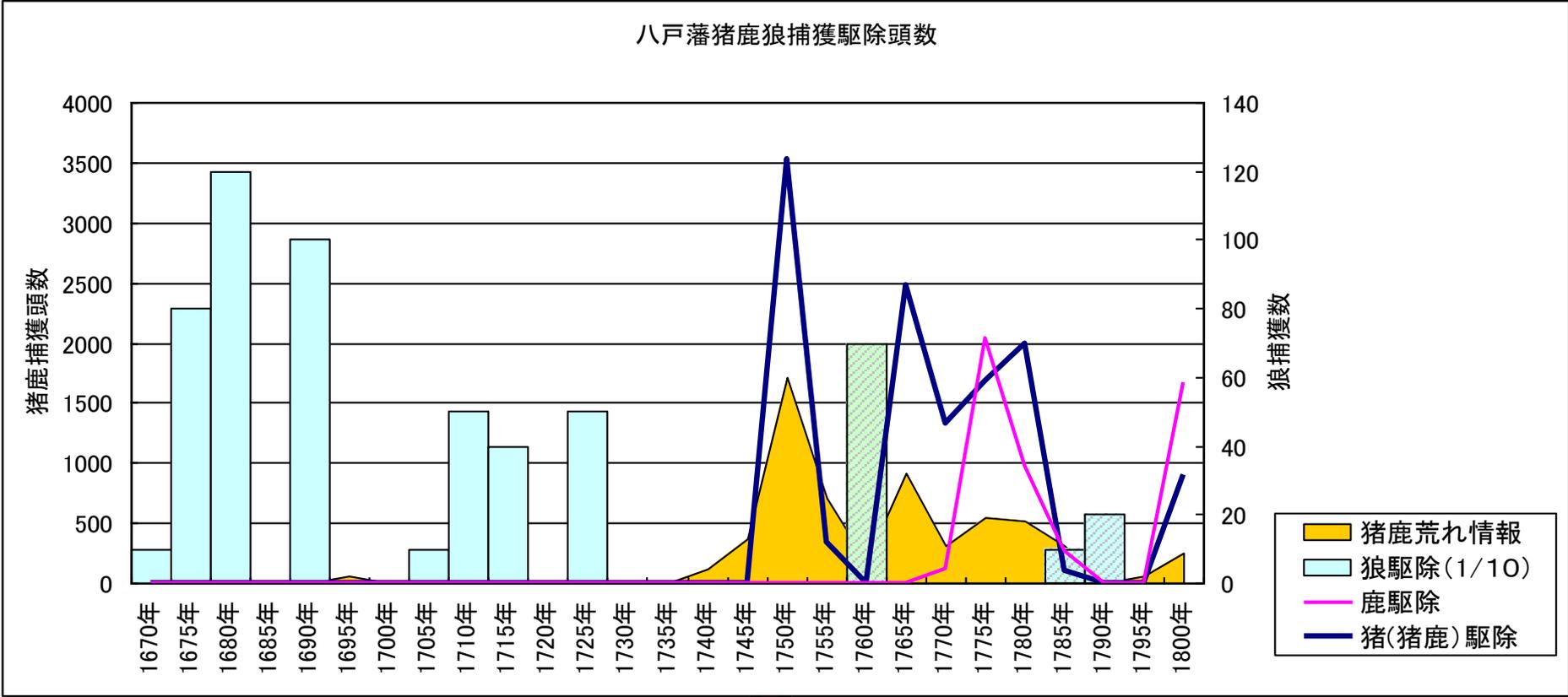
- オオカミ
- イノシシ
- ▲ シカ

期間：  
1670年  
～  
1800年



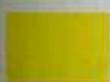
※ 5年ごとにまとめたもの

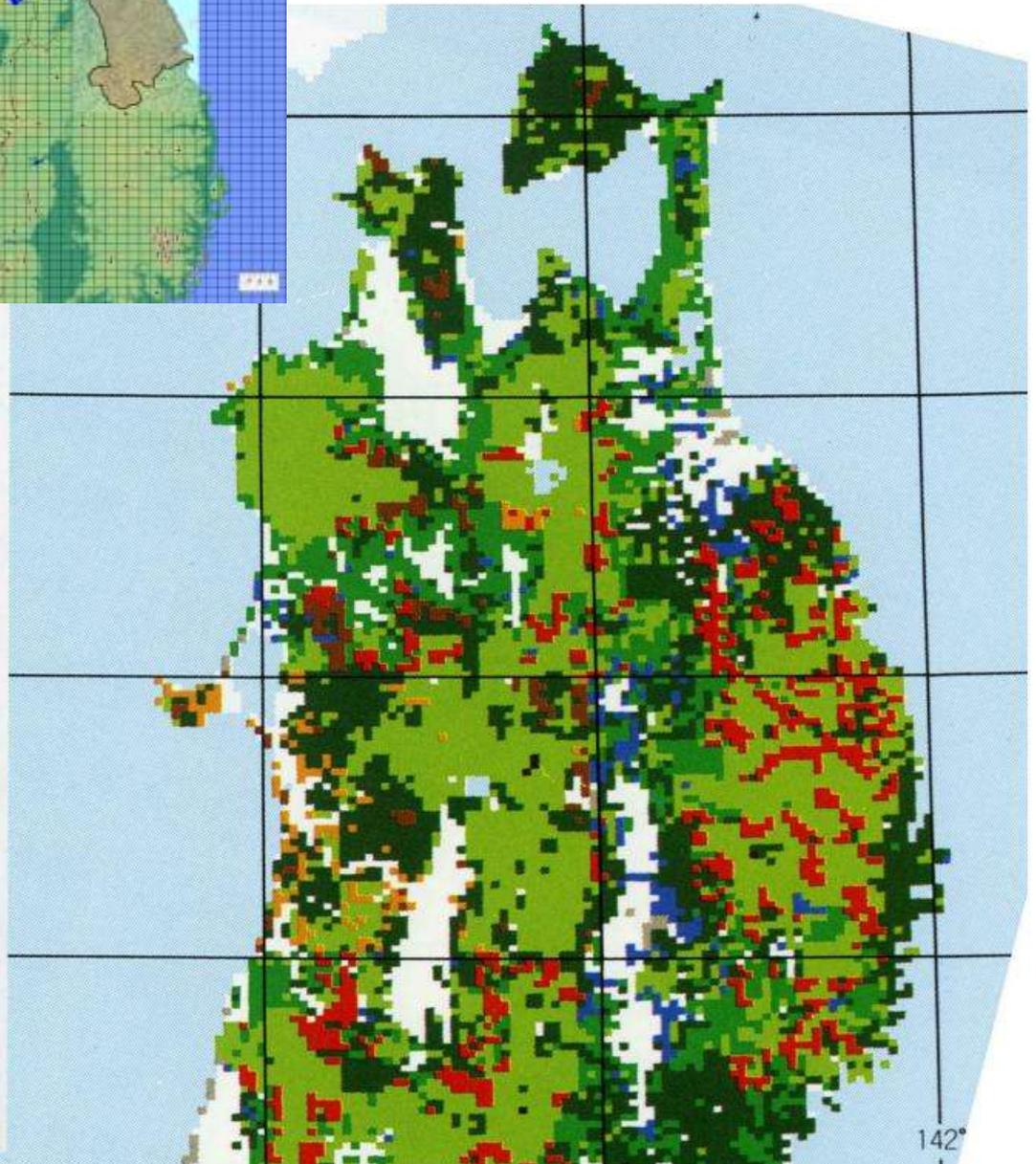
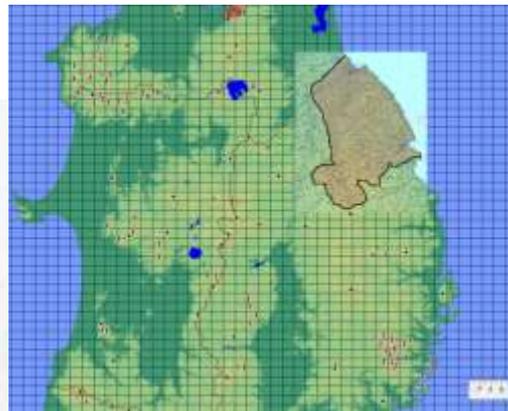
### 八戸藩猪鹿狼捕獲駆除頭数



1749年猪飢渴3000人飢え死

凡例  
Legend

-  育成林  
planted forest
-  松林  
pine forest
-  その他の針葉樹林  
other coniferous forest
-  禿げ山  
deforested land
-  焼畑  
shifting cultivation field
-  柴草山  
grass cutting land and fuel gathering forest
-  その他の荒れ地  
other rough land
-  その他の広葉樹林  
other broad leaved forest
-  矮松地  
dwarf pine forest
-  混交樹林  
mixed forest



# オオカミ絶滅をめぐる諸見解

- 東北地方北部ではイノシシ、シカの地域的絶滅以前にニホンオオカミは積極的に狩られた。
- イノシシ・シカがいなくなったから、オオカミがいなくなったという関係ではない。
- 「病気」の感染で消滅したという意見もある。病犬の話題は1750年以降。
- ニホンオオカミの消滅は、馬産地のウマへの被害を防ぐための駆除圧が原因だった。
- 猪飢渴は、馬の保護によるオオカミの駆除が原因か？ 因果関係は成り立つか。

※ 「オオカミがイノシシやシカの害から農作物を護ってくれる神というのは、「ヘビが穀物を食うネズミを退治してくれる」というヘビへの信仰と同様、自然観察による理解。「犬神様」

## 犬に関する記述

1746年	猪荒れのため犬を飼い置くよう達し
1751年	家中町内では、犬による怪我人多く犬抱えを停止
1808年	「病犬」多く、犬狩り命令
1808年	領内犬狩り、総数444頭(♂264頭、♀180頭)
1813年	犬狩り命令

# 江戸期・男鹿半島のシカ生息数はありえる数字か

秋田・佐竹藩(久保田藩)男鹿半島鹿狩り

男鹿半島面積＝男鹿市面積とする＝ 240.8 Km<sup>2</sup>

